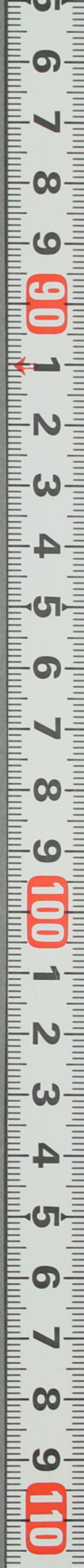


^ 13
4038



門へ13
號4038
夢

繪本右圖記三篇卷之十

目録

中乃信忠御生害之話

明智左馬次室町の城の天守を

石撃火銃とてお崩し圖

誠智小十郎勇哉の圖

信忠御生害の圖

猶回心次忠を關て命を今ふる圖

先秀軍勢宿於妙心寺話

土方次郎兵衛殉死の圖

江州備前
兩儀孫十郎
塩津

先秀妙心寺にて自害せんとすは圖

六月二日後の日記

安土の城下發勅の圖

明智左馬右衛門孫兵衛造て勢田を渡り圖

面譽上人右大臣河原の

遺骸を葬法に終りの圖

細河刑部左大臣先秀と結交の圖

細河左八郎妻女を離別の圖

繪本古圖記三篇卷之十

中將信忠卿生害

世間何物最堪憎 蚤虱蚊蠅氣賊僧 如脚車夫糸晚
母濕柴爆炭水油燈 二几元の僧柄子庭傍 ひとき物と歌て
能る詩あり 惟任日向守先秀 其若信長云を 幸徳寺に秘匿
信忠卿を迫て曰く 害しをらんといふ 是や悟むべき 拍の表上と云
二条の城の東より 向ひ 赤松村上 和泉守法圓 構尾兵衛 義朝
山幸入る 山入村 敏三郎 系則 波加部 権政 貞次 日向小左 貞員 之 三
子 余入ひ かくと 美奈外曲輪 一子 系則 勇と 進んで 採りたる 此
もと 防ぐ 勇士 小田方には 入る 猪子兵衛 團平 八郎 村井 義朝
等 百余人 切て 出死 ぬて 裁ひ する 猪子兵衛 團平 七 威する 具足

候に
を死
見
と
と

真言三蔵卷

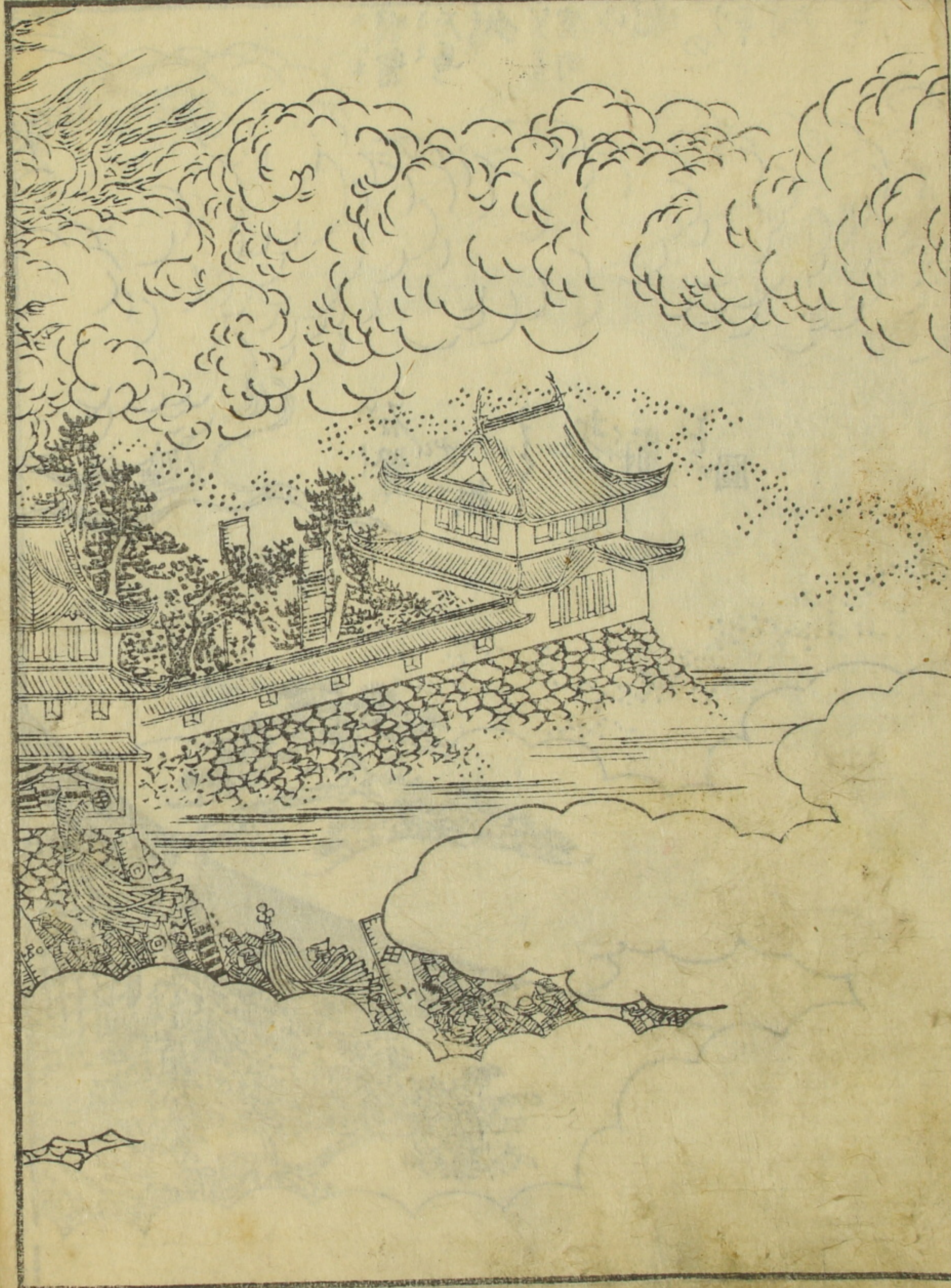


明
石
馬
外
室
の
城
の
中
に
と

石
火
大
鉄
崩
と
圖



其二



真蹟三篇卷十

三

備三戸にすのち方を打ちて敵を撰りて切込に強く戦ひて
 降えよう打ち大よといひて逼りて糧武者と引捕入候とぞ
 ころろ先秀の方村上和泉守の良策神谷を兵備度武と名乗るを
 の者もあらん其も力をおぼして表をうけ兵助も互もと細付する
 上にあがりやにけり組川將んけ接合が神谷が勝りん終に猪子首と
 名乗る方の陣へけ入りて圍平八郎の先秀が軍兵の村雲立する其
 中の一喜叫で切西馳ぬけ走退ひ七類八廻て戦ふ様天津のどく
 見せ敷て進歩兵は比田帯カハ先秀が身内りてせよはける強兵打
 抱えてい獲るきり利かれば圍が勇戦心ゆくと長刀搦込を要するけ
 て後甲合圍がたぐりて突込槍爪ひらりと二三度にも度比ひし附入
 と腰の番を切敵は後圍と討止るめはどく名乗得兵殺多討え

とすも城中に三百人の軍兵あて介も表と合者うりも争うは合い
 表より戦うしと思ひ圍め必死の勇士今日を限ると防ぎ戦ふを惟
 任將大軍ことすも尖き陣先はらひてくも負討死殺を去りて
 じもの先秀美徳とぞ刃々たる附り明智左馬次先主と知て中
 多今日の戦ひ敵の小勢味方大軍一討に攻干以戦方るふ勅味方の
 勢及を去り先令く公威と思とて後兵進付得候と受てり先主
 虎毒のりことほとて城より二三束の小りり先主の別業の此を
 地形よく殿造うたかれは城よりもたたくありたり左馬次軍勢
 をけ押殿の楯に上せ平丸と目出の石槍火銃を放ちたるは敵合戦
 をお崩二日は嘯と燃えたり其中一弓換炮を敵後討込るは城兵
 多も大は強き防ぎとてむるもなる

搦込のふけ石火銃とあるは西備火銃を指す
 とは敵の石槍火銃の足るるや物を懸具の類に

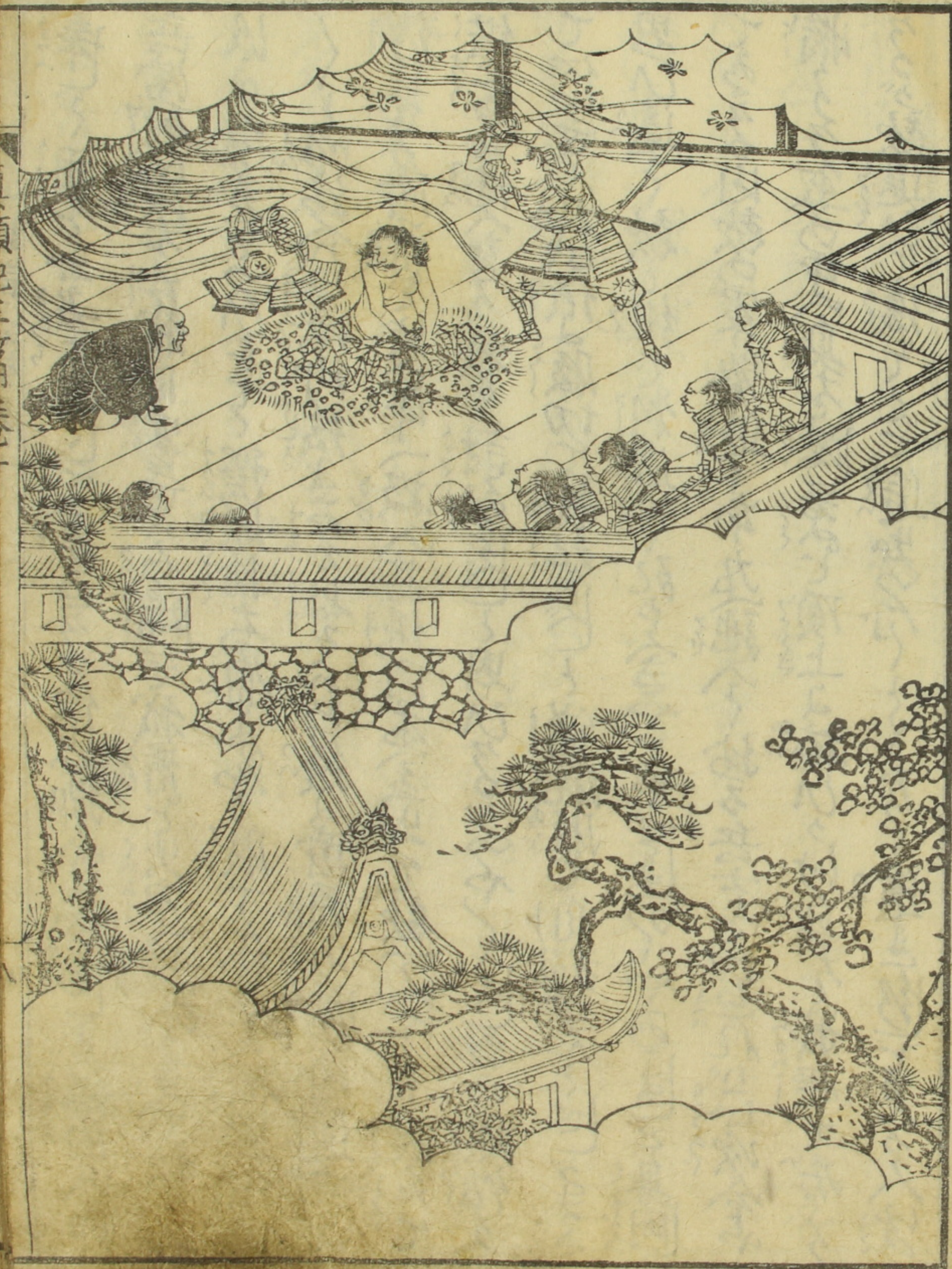
小十郎 義智 義勇 の 図



吉原三層塔

大著の陣を唯任方の勇士を以て得くといふは、
 熾の器あり、進めくといふは、二の丸と押合し、
 智玄番利之が身は小十郎利を以て、
 今も出味方の兵士を討死、
 今も御運もわくこと、
 といひ聞け、
 あい君もたこそ思ひつこと、
 汝若しと令を永き世の道と、
 をまろくと、
 今三途の川の瀬踏は、
 燃戸押合き大著と申す、
 今も御運もわくこと、
 といひ聞け、
 あい君もたこそ思ひつこと、
 汝若しと令を永き世の道と、
 をまろくと、
 今三途の川の瀬踏は、
 燃戸押合き大著と申す、

花に返る君が怒み、
 ほととぎす、
 き柳を匠、
 出るを、
 行も進で、
 突合、
 擧て、
 を、
 女も、
 羽柴、
 敵、



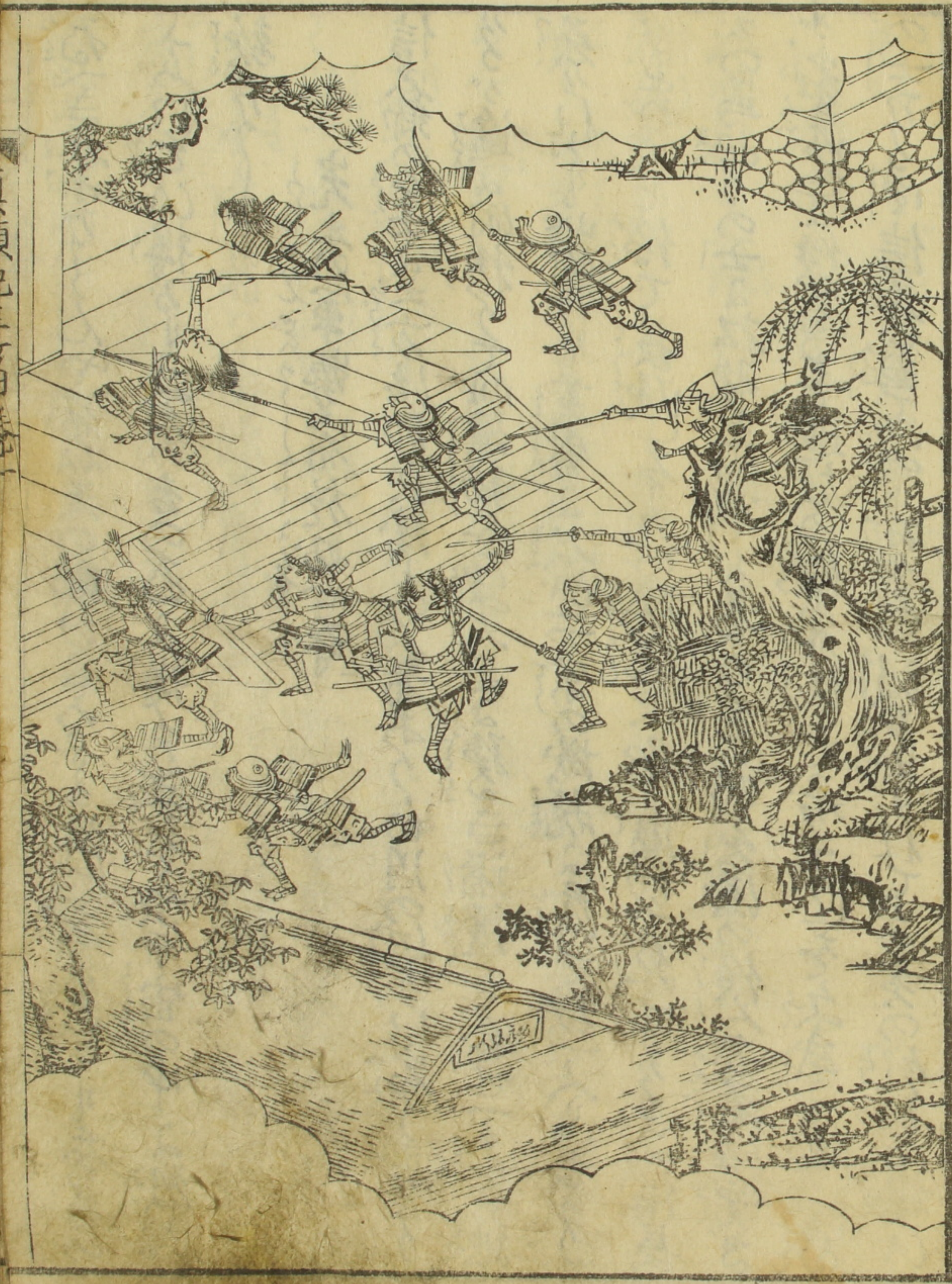
のみまき
 信忠御
 生家の
 図



真言宗三層塔

降しく田を由安去として急ぎたる信忠御今の心腸」と藤田又即
兵衛尉正次を召我自守守り候て我首と矢中へ扱へりて敵は後
以のりてとひもて程脱捨去膚よめり腹十文空は挫切て藤田
くはつた心次河後よるおそいれ後河首打退河首言よ
但せなり河首と矢の中へ扱へ其傷口を立出で敵一人も討死
借事な候なり我も討死せしと思ひ多うぐやくはるる衆は
て何ぞん兵は候は腹切て胸記せしと諸肌脱て自殺せんとせざ
思ひ遠く敵と組で刺違へ死せざるやとせはやくやみ候と身回
てある内敵の軍勢退く本丸馳令する兵士を切取れば心次命や
惜う多事の中へ身を隠すと頂上へ掩ひかけ身を我懐て居り
らる敵退いて後てこと這出のうともなく道と逃と見る人は

若凡にいきして悪くあり候も城中の兵村安とて始めし一人も
る者なり我敵と刺違へし討死せしもあり上下の兵卒都合
又百三十余人皆討死をてりる先秀方にも負死する八百余人
及び其日の事下冠終は落候たりる河は信忠御河年二十五歳之
此若若若年候はしくたれども武おの志ゆり終ひ天命令し河産
とばつたれりたお軍かるべきと河長なる世とあり終りを俾
致るぬらうり信長と云ひ信忠御河又河は賊と云はしつる
先秀のこれ何者をや信長と云ふ河の形勢と考るる天世天中を
来たるに揚合たりたりとしか英雄豪傑傑のぶとくに集り智
ひ勇も我々もとも悉く志を得ど中なるうりてひてり河
る先秀を匹まうり敵の終り天下と世中と極るの豈人向方



命を
 守る
 忠を
 圖る
 強
 固
 之
 攻

真
 顯
 三
 篇
 卷
 十

るべき業方うんや皆天の賜けあるがらにあらざるも亦その
ふにそい得るも又亦其のあは得るこそと宇宙の中は放
款方

光秀軍務宿於妙心寺

信忠卿の去る土方治郎兵衛とる者あり白川の辺りに宿り居り
るが遙く時移りて此強敵をば大に強き諸將を合せ一糸を弛
るるも此時日も黄昏及び二糸の城既して落ちて敵一人もあ
るべし天と信で長敵を九の焼路にあり腹切て死するも又信長
の馬ありの士は松野平助とる者あり西英徳の侍人安藤守房
が家来は侍を逐放の後牢にして居りて居りてを文武に遠く
の士は信長を以てて改石出されては其の死を以てて信長

勲仕りく此抄も信長の功を著る八幡と系籠(系)と居合と
比日奉の御存慈を以て此度の御去りのは候るものや
神明にも足離るれとと懸るもろが不冷致然光秀を一方眼と
別遣り記とる者あり此上の中事ありと其後忠と系部を
奪り母屋内為父と奪て仕官せんを頼ひ日々光秀の足違
らんと頼ひたりも松野志意得がく曾て以て討面せし制(新)飛
も及ぶきのゆはるれを以て敵の手に殺されしは此上の事
と腹十文字に捨切て義のありと命と遂に今日の日合致し
命と命と世者い小田原兵衛長益信長の命は後に任下山内徳理之亮
康孝のよとと信長日向守光秀今朝来りし事候事及び二條
の城を以て信長と御つ子を討ちつとて岡の原に候の青冷



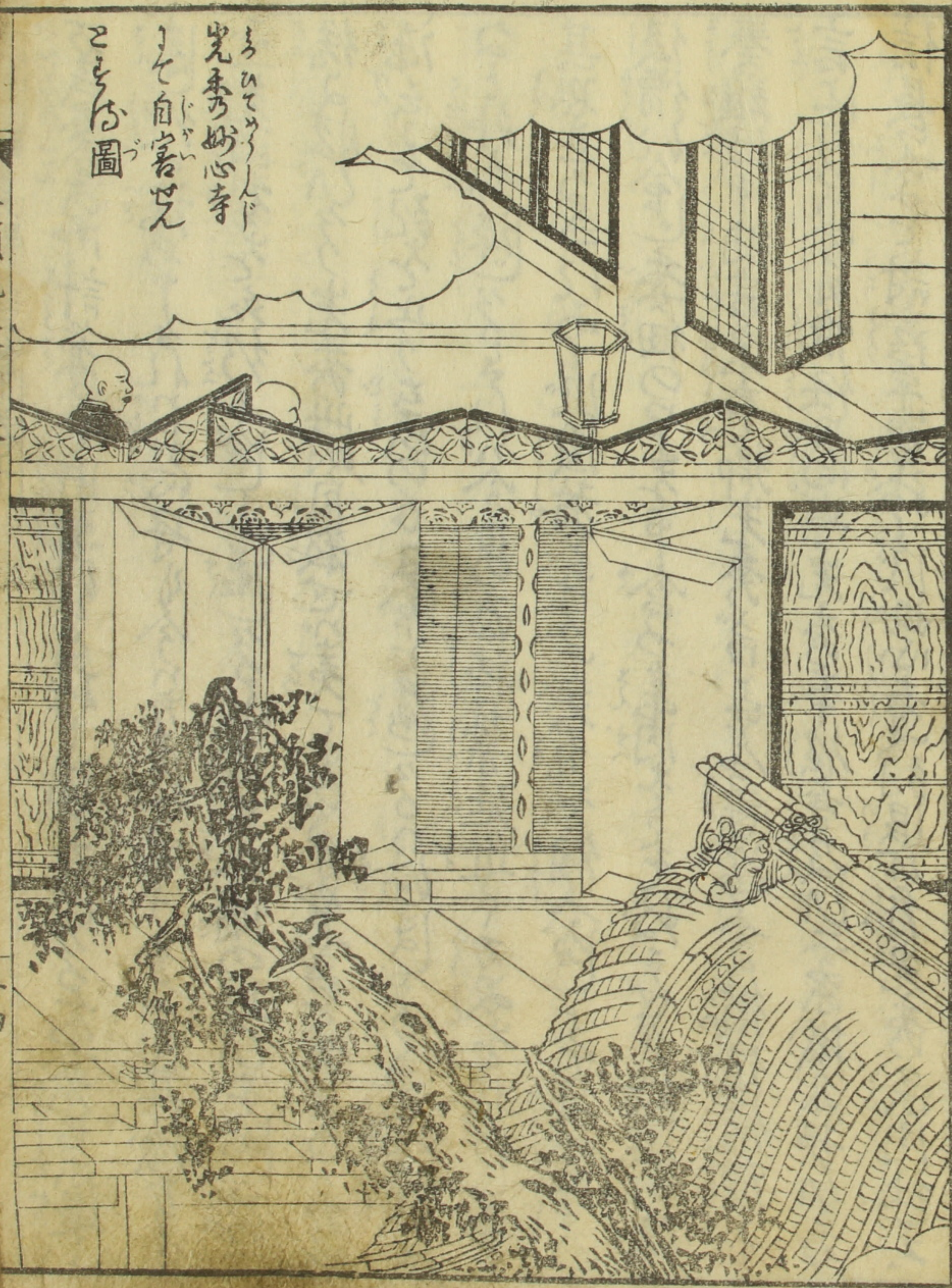
いざな
王方次郎兵衛
殉死の圖

真言三傳卷十

禁廷へまに及びば活中活外の騒動大方なりは男女老若東西に
 南水又ひひこいふせんは「やと啼哭」を所可代を始むと
 の後人下司悉く二條に籠制保とる者りなく上を中と以て中
 にも平徳寺の末さく「宗流組合の寺くより傳奏とほを」とり
 揃の園をめぐり「これ何換なる凶事の出事人も計かじとそ
 内裏守護の官人衛府の侍門」と固り殿上は「附の園白左右大
 臣と始り糸」せ「松」を「花」月「御雲園」を「上」を守てぞ「持」る「宵」
 二日黄昏に先秀が軍勢「日」は勝園を「上」げ軍兵を「一」面に「下」す
 慶大宮の西の方妙心寺へ引えり此時光秀の信長御子とを
 易く討せり多念の怨一討は後き天感斜り「は」今「心」は「お」つ
 りも「な」く「自」殺せ「た」と思ひ「佛」殿「は」縁「良」之「く」礼「拜」「釋」世

けりて一聯のふと自書と此例は「指」る「小僧」は「光秀」の
 氣色とさとり「辭」世の「頌」り「や」あんと思ひ「急」ぎ「比」回「帯」刀「三宅」武
 部「両」人「の」此「の」を「若」両「人」大「は」務「き」明「智」九「馬」女「及」回「傳」又「即」並「川」
 掃「部」之「助」等「は」相「澄」「を」其「の」又「人」の「士」光「秀」の「前」に「来」り「逢」く「や」つる「は」
 往「昔」設「の」湯「王」の「夏」の「后」に「て」築「王」を「放」ち「周」の「武」王「殿」の「后」に「て」
 とも「討」王「を」征「せ」り「も」き「我」朝「獲」我「馬」子「大」臣「崇」峻「帝」と「執」北
 宗「義」附「の」後「を」羽「院」を「流」し「な」り「和」漢「も」に「女」道「の」若「女」執「と」る
 の「之」臣「の」産「業」を「保」ん「ど」る「英」傑「の」志「は」御「る」今「御」不「及」の「換」を
 原「は」小「御」光「悟」の「後」是「来」り「く」は「就」中「武」門「の」な「り」ひ「悪」の「以」教「し」
 悉「く」瓜「が」む「む」り「む」別「智」深「の」勇「士」好「ん」で「是」と「終」る「は」い「は」此
 上「の」御「身」を「食」は「て」あり「れ」都「は」旗「を」よ「ら」れ「諸」國「を」征「天下」と「志」す

もうひてやうしん
兜衣の妙心寺
こと自害せ
こと心圖



真言宗三門卷

万民安全の計兼て肝要にいと極く御志はるるを先長宗運に
遠くは傳り申す今日守り今方これに申すもよく其後方々
先政勢を先長宗運に譲り諸臣安堵の思ひを以て皆
後々懐びたり先長宗運自教せしめてものもなきことなる
海をとり記を止り去民のみよ命と護りてははるる宿業の
いと外へ降りたりしが今日の御神禁廷進くかぬを振りしり
其思ひたるにわづらひ後者となりて去を伺ふにいと妙心寺の
僧僧に命じ委細の口を申す合め奉内をこそ致させし此所の傳
奏難波中納言宗運を御先長宗運と申すは又彼後僧謹ん
言にたり今日惟任日向守先長宗運及び二条堀みおひま
信長宗運と討た奉勢は妙心寺へ引退ひ有先長宗運内仕天

意を預ひまらぶくの石今日の合戦血をわや職衣を恐る妙
心寺の後僧我々を奉國なる先長宗運が後流去は先長宗運
氏と鄰まは神明をさじ佛を以て遠い神社佛圖を焼せしむ
る来長宗運を討たては海の内巻くこと知り先長宗運信長
が旗下に属しあつても三代お恵のまことやともなく先長宗運
先祖清和の流裔なり源光が後流去は先長宗運守先長宗運
として後代朝廷の臣也信長宗運平公なり相國清和の流三信宗
御資の流の孫斯は武衛家の臣下なりは又御附持勢と諸臣の
こと震い悪運日に繁んらんが武門の風俗天下のおも先長宗運
日信長宗運を誅す年伏して居るは赤心と考すに地方の
征伐を降り終り不問して天下奉平を奉るにいと謹んで奉國を

是ハ雅波中納言殿此有委細執事の諸御の詮議より一ツせは先
後傍にみゆる妙心寺に招き給へし後より勅定の詔き申進んばと
後後されし西人の後僧拜謝して退きける

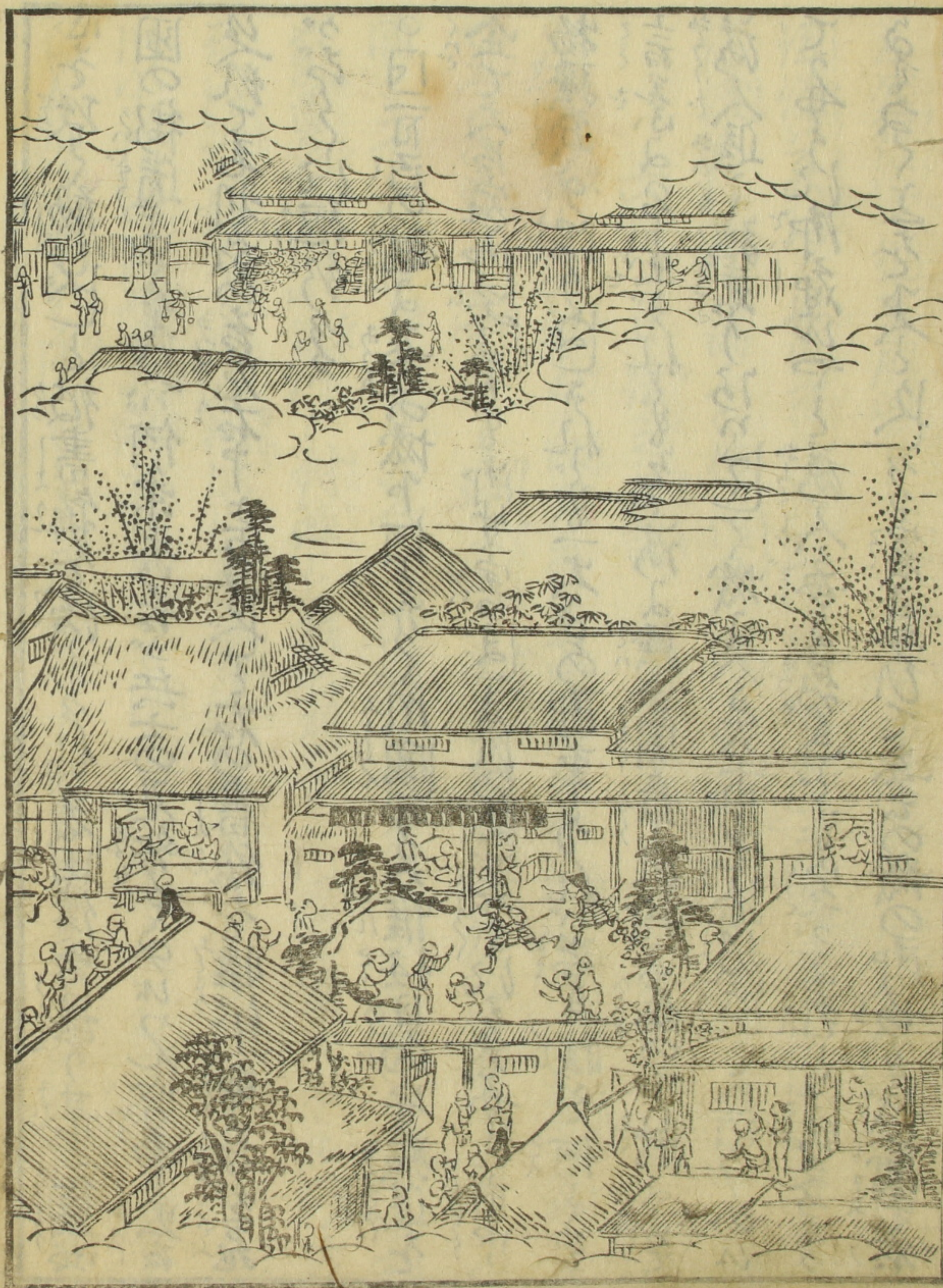
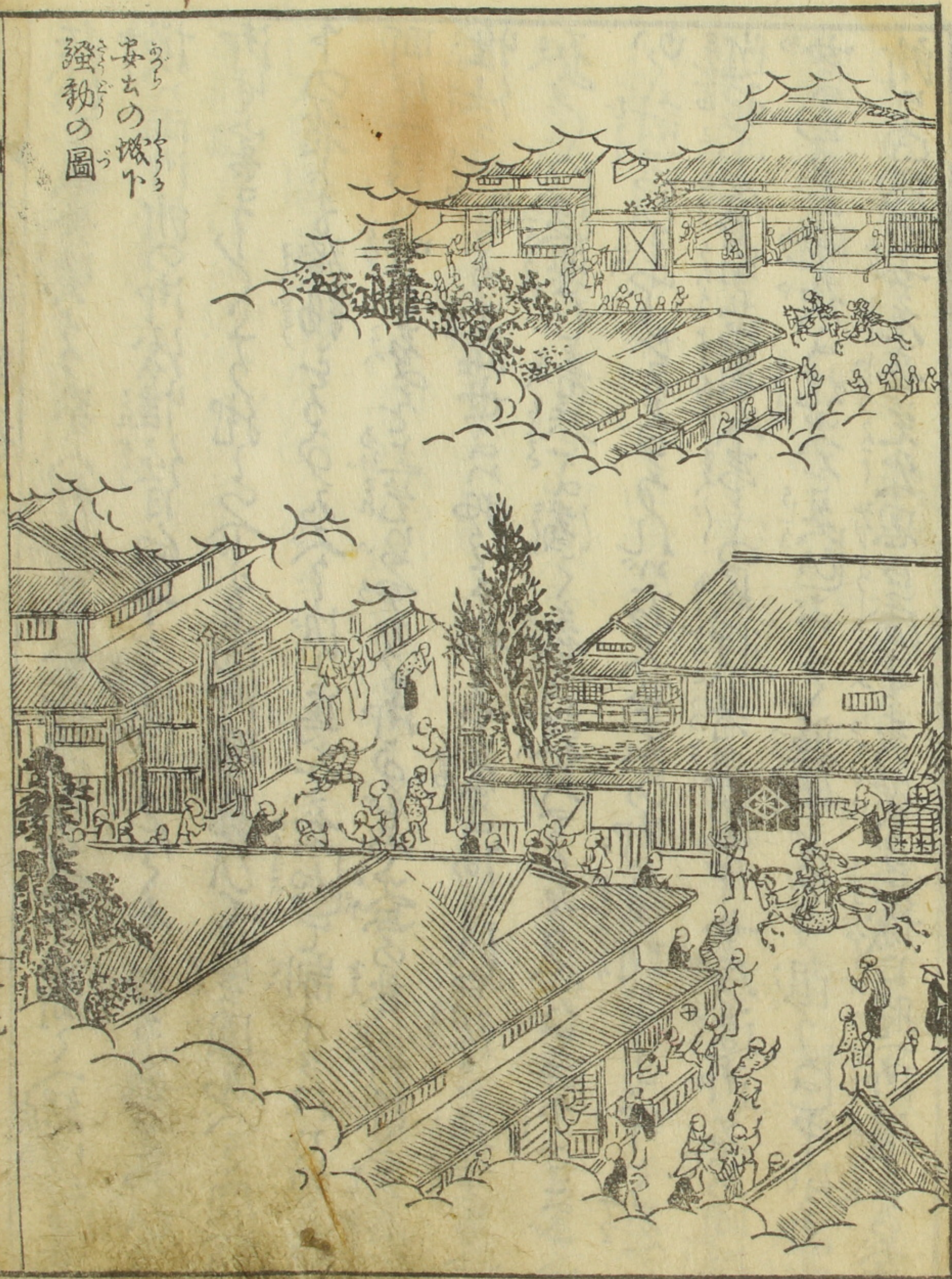
六月二日後之日記

○二日の夜亥の刻より比光秀は後田傳を遣く百十を我の勢
て大の要を失意せり汝又道の雲の爪今度の後を申付る乃
同くまを仕換とるるのみづから羽柴孫守今西國より来て毛利
家の勇お吉川小又川と對陣と我毛利家と内應軍兵を指し秀
吉の勢討んと思ふ汝は内應の書翰を携てる松の陣をよむ者
川小又川の西にお遊し我心を演吉長に必秀を兵に思ふ
ら此計略を遂くするのみづから比光秀は等閑の役後に飛

心を攻め勅しと被書翰を後くしは後田傳を長り某を兼西
國の街道より是は如何なる者か兵士の足踏るのみりん心易く思ふ
以て毛利家の吉長と申すは右の書翰を懐に申す打さる
がどくは謳りたる

○日己の刻より安土の城下何となく風圓なる惟任日向守致達を
企て大屋家御つても申せ害はまればはそくにそを申し市中
物騒ぎの限りはしるるも一ツの御事なりしは恐と懼を何とも
言ふ事には申せしもそは強き固章に就て末の中魁
為人追ひ馳来りはらばく城に入ると市中に級級にこの行のひ
てうやうに御座いやと為人毎々見ゆとも定うは是と申すは
るもまくとを申すははらるる安土の城の御事なりしは

安去の機下
騒動の圖



貞顯記三卷第十

兵衛をま秀実より家人外池甚又九清門を城下の所へ獨りせり
 換り西洲所の洲後惟任日向守が逆心に今知京都を抄いて
 洲を害ましくして我らも尚洲城を抄いて堅固なる間城
 下の者ども強勅とらるるに馬を系也て制らるればと
 町中一日は嘘と我を上げりあつる洲の母の懸る源氏天香を
 惟任が討たり又此世は抄りぬとや我ら何んや現々と老が男女
 妻ぐに悲心着巷は濁る我ら我ら心なす下とまよふ
 か計思ひあつるもあつるに右大臣家の洲臺所の中へ
 近習小扈家老用人事の足利小者奥の女中女房連洲茶の同婢
 女とあると情状又火を焚いおと追返とらるる限は中洲臺
 所の出城の安危を我ら思ひ痛生秀実が居城日時(洲退去ぬる)

はななく始出されどと秀実何条其後及いやくは尚城と括じ
 防戦はなれたいとも換り中止るるは又後尾張の諸士は強勅を
 吾ら定むるものもさく強き妻は後れを引連て思ひくは後行
 又創今日二日の夜に今山崎源を九清門とて侍け強勅に心れは
 又の光秀に心をあつるに己が身を自焼く居城山崎引るは家小
 抄いて秀実又思ひを抄じかくおと諸士の心離散して防戦せん
 思ひもよけしけし洲臺所公達其外の女房達も皆く日時の城(退去ぬ
 じめ堅固な籠城ぬ)と俄に日時の城(は強き中世)ぬまは前二日
 子息忠三郎(或郷洲迎のおとて系與又十挺系馬百足傳馬二百正を
 引せ安と系に)さきい秀実又はびり系を傳人後日時の城(を
 具)なほけ洲臺所を始り女房達洲城を用まつる上金銀



明智光馬故
 浮橋を造
 勢田を
 圖

真蹟記三篇卷十

宝物を悉く運びて燬す火をけ焼捨りしに信長も右兵衛右衛門
を流す下りの信長も素直心をそとせりて天守と始り造りて天下
を敗の結構を素直一人の料簡を焼失人の勿持りきりしに先秀
の飛人よひ焼ゆるもこれれ飯合焼じて己が幸よおととも
天命何ぞ久りくんや又財宝金銀もえおせやはさぞ某熱心し
御基所を退去のほに令銀宝物を採迄とまらんけとの五合
は此此後よ打捨りしとて御代官本村治郎九郎門の城を渡り時と
是てそ急ぎたる叔父勢を悉く拓き集めりし防戦の備を望み
人殺んとも又百余人と使へり

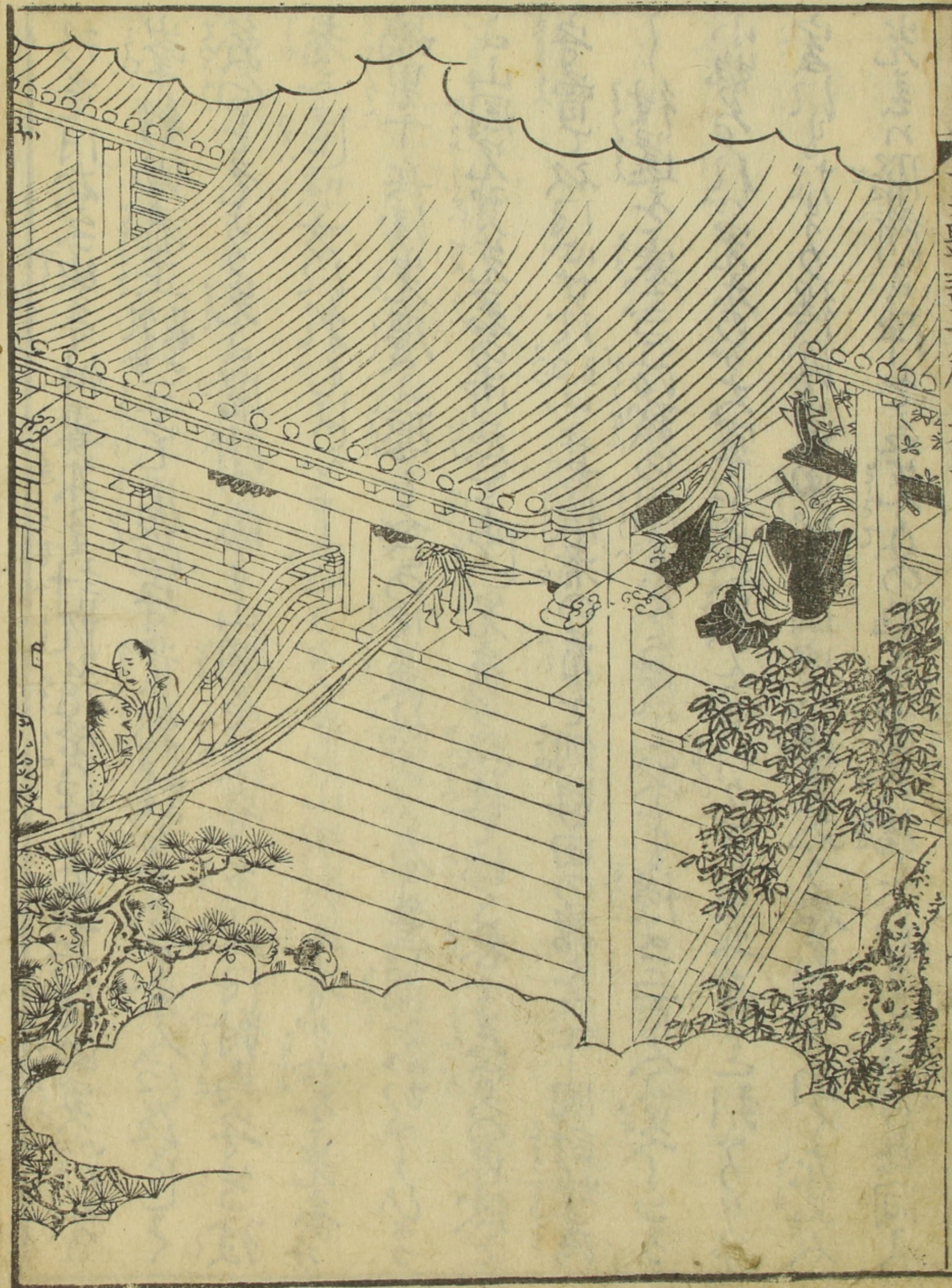
○三日の又先秀中絶しては安去の城の信長への居城なりしに
どんけりるべしと明智左馬助先秀を大おとして荒本山城守

初より友之丞手仲妻本を計取能事には天の兵衛政実の長今
峯新助泰正乳母長子三宅周防守業新助長子等々余人は及ぼし
後向とそより先は膳所の城を山園兵衛守系隆日對馬守等夜
着を遣味方にれじよと送りたりそ山園對馬守が女を先秀の
婿男十兵衛先慶の娶とそこの中兼物なるなる其因をわたりし
山園兵衛先秀の所懸とゆふ先秀が殺害とゆふ悪と其実の思故と
守曾て心せに却て其使者の首を刎勢田の橋を二十間計燒廢
し往還を塞ぎ防戦の用意をなれりとも後二三百人といふ
小勢なり先秀が大軍とて我人の計りて三兵衛と列りたる
室にもたまり得ぬして甲斐の山中へ逃入りぬ先によむく九馬助
先秀の膳所陣を先秀の勢の山田兵衛を船を渡其間よ

面譽
 上人
 右大臣
 街の
 送骸を
 花井里
 法
 後約の圖



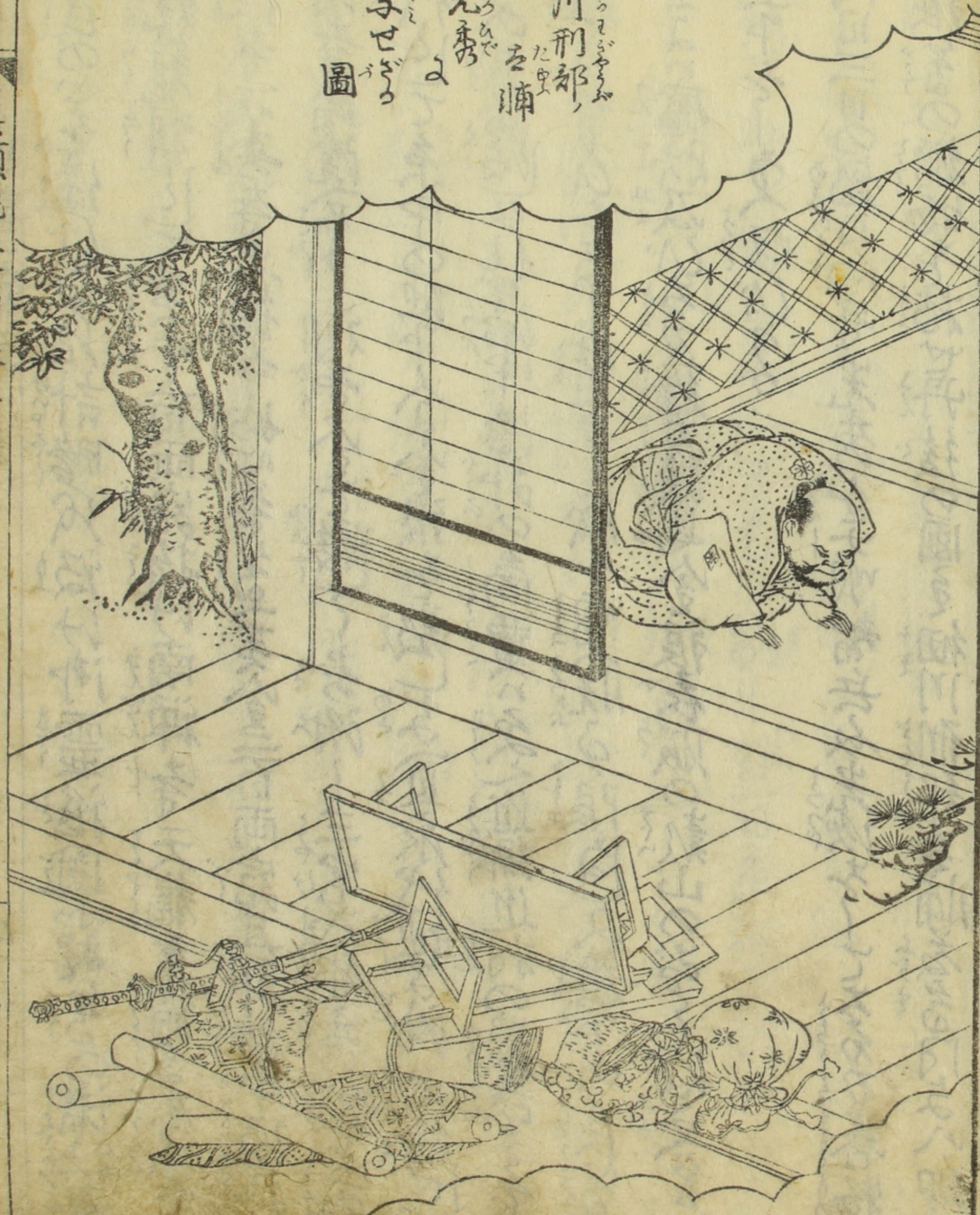
真顯記二篇卷十



浮橋を營し勢田を渡りて安去をじて急ぎたる在馬女も諸軍の
 路に引添て播きよんでと驅りたり於て安去に道なき侍を番兵
 ども出で防ぐりたりやとち換炮候も侍列と私に押入り安兵
 と二人もたゞ農工商の者番所く守居て敵てある者も
 なく安くと城にむきを代官本村治郎左衛門とてり敵討叶は
 と城を捨て落りぬるよあひく在馬女兵刃を用ひじて安去の城も
 入令根名差を坂本の城送り頼朝末頼朝の類まで諸士及び安去
 城中の人民等に悉くかまひ諸人を懐け其身の安去に在城に如
 をせんともろ高橋をばよる後て諸方軍勢とから敵と防
 且政をを回し先佐和山の城も荒本山城守の子と籠せ長渡
 の然も妻本を計り河田万又郎左衛門と二人を名守らせり

○同日三日阿弥陀寺の面譽上人曰奉信長云沖の沖懇情よ
 敬希せ且つ日向守にも入魂之る凡が右大臣沖の死
 骸を葬りて有る光秀も希ひ候り光秀も流石に後の奴と
 とて痛しくや思ひえ都て昨日討記の末後世の弔ひ宜しく
 也とてゆ金三袋面譽上人は道に凡が上人甚に恨む右大臣沖
 父子の遺骨を拾ひ先は明智左馬右衛門長光も並川合右衛門等
 より親信長との沖首と諸もよ去中も葬なり其奈討記の
 野悉く法号を授けり云此に記法は供養懇と終せり
 けさ洛中の僧侶男女誘ひ集り泪清り佛名を唱へたり
 一守之板光秀系中の容体は何今又行とる静なり此安
 彼至に集り後海文に止りたり初ては志遂難くんとく

細川刑部
 老秀
 与世
 圖

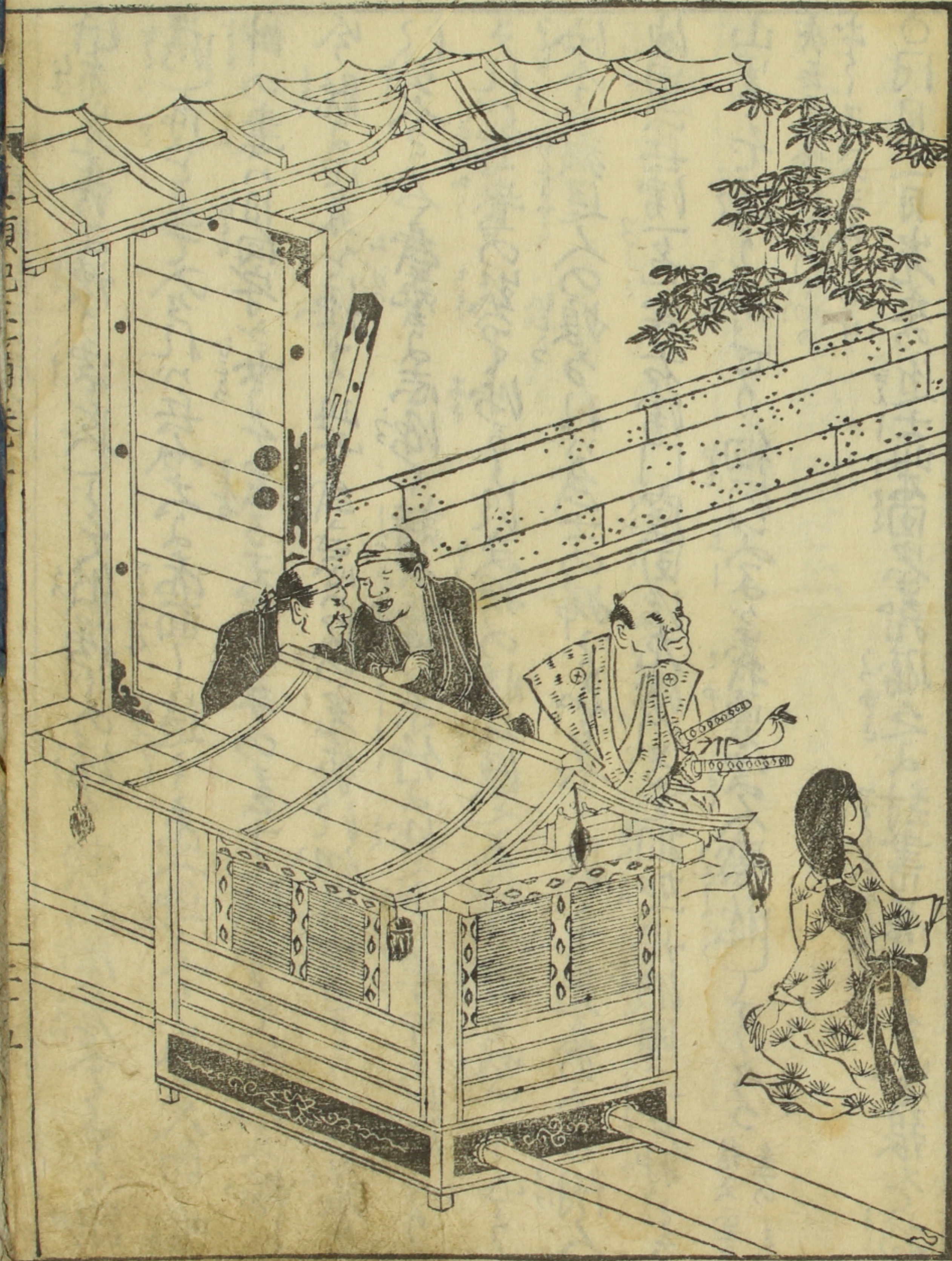


真蹟記三卷十

諸民の心を強ひて計略及び津靈祇園小社等の諸社毎
に燈籠料として黄金百兩宛持け南禅寺天龍寺相國寺東福寺
建仁寺万壽寺大徳寺妙心寺等の黄金三百兩宛其外洛中洛外
の諸寺諸院悉く御事金と懸く奉附し三宅式部宗伯と不
司代として京中の地下人は金銀を徴し且永代地を賜免除世
しるの旨御法々い洛中洛外の高貴の及近郷近村の農民まで
の難き掛ひをまし皆万ノ歳を喫悦み限は又難下の良等
おすの感状及び石刀羅刀護馬金銀衣服の敷山のおまに又金
を上下をう又ほびりり

○同日三日の初日向守光秀を土明智兵女光次をうてち力刀春物
令銀等の贈物を持せ丹後の國を細川刑部を捕るる日と八郎

唯中の方(まき)たるは秋多々年信長云(對)懸懐の依少うり
統も臣の道と守り教て怒り以蓋し忠と奮とを以信長却て
殊然を執り友の先にしてをを制し唯二日京都を抄して御
ふもいけ字と遂にせ平ぬ統が縁家の好も我の方を合せ
統らるる大感涙りみづり其上の御丹後又領馬を獲捕摩と係
て外せらるるまきは垂細光秀の口よを演吾は細河又をそとほてよ
發き且の秋き且の怒り後者明智兵女に白ひ妻を融し罵て申る
を我の文字信長の大忠と蒙り今丹後二國を以妻子後款安撫
恒らるるの毛皆君の恵とかりや光秀も又を日と統とを我の
謀計を以君と統とある殺運人よとらるるの勞とあがはは統の
後すらるるごんい忽と討て捨さるるれども宥恕と援助の向とぬり



其二

真顯記三篇卷十

二十四

け者先妻又後字長とて彼様どの様う御座る事と跡
 落し座と立て入る几が兵女ふと希面一遠く遠く迎へりぬと八郎唯
 仲の妻の日向守が女とて去る天正五年の五月十六歳して細河の嫁し
 今既には年を経り山女武正の心の先妻に似て優きこと男ある
 にあまの志願し志願く詩考達し系行の妙く容色よくた勝なり
 されば鸞鴛の誓やあまの婦の情は懐くと節妻とて中やう
 汝今殺送人の娘も几が武正の婦とぬとて先妻の附人
 他田六兵衛一名宗右衛門窪田治九郎等と相加丹波國三戸村と云
 山里をて送り降せり細河の父子が義勇は人感服しうりたる
後王正三
馬者その令よりよめとの
おろく通へます婦と御し
 ○月日三日光秀也也士世田忠房勝之は封書并てか令銀を拵

世田忠房の代小田七兵衛尉信澄より通し書て計後の事とて
 昨日信長とて討課せぬ蓋我ら力を合せば大坂安曇の両
 城とじて近は橋は河内三ヶ圃は太守とする送りたる
 信澄等とてあまの志願く容色よくた勝なり
信澄が一件委
限りは

繪本石園記三篇卷之十終

Faint ghosting of text from the reverse side of the page, appearing as bleed-through.

好い事あり

よあり

光秀

信長をいふておれ

林とて

一にたてしり
強はにくもた

江州極洋支儀



品出書州此



— 下 7/10 号

11/10 11/10 11/10

De De... 11/10

昭和42年12月12日寄
和田大作氏贈

